

令和3年産 美里地区の大豆情報



第2号 令和3年7月12日

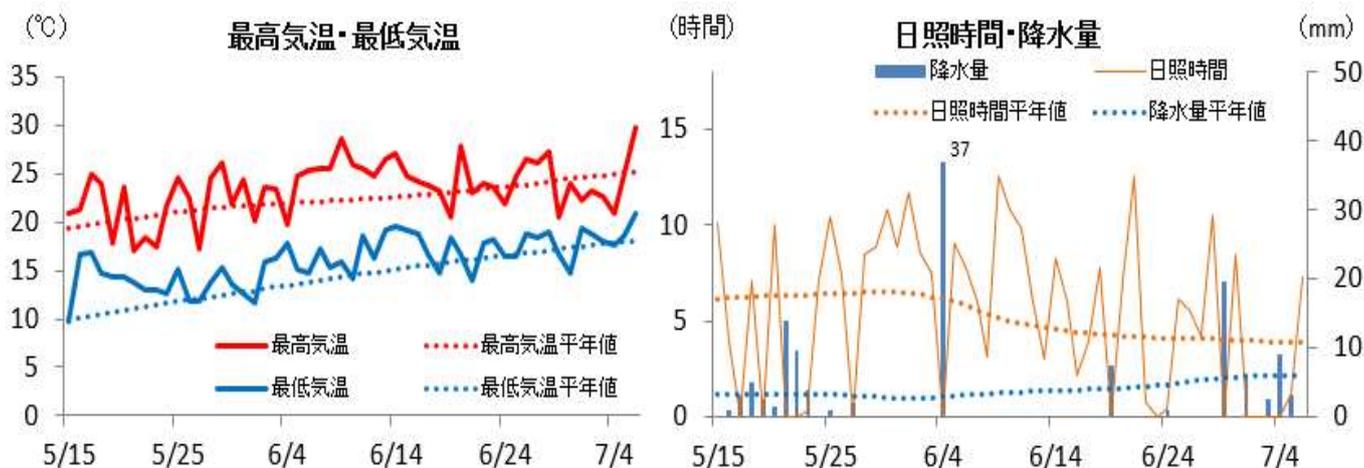
宮城県美里農業改良普及センター

TEL:0229-32-3115

FAX:0229-32-2225

<http://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>

1 気象経過及び生育状況



【本年度大豆の生育の特徴】

【標播】

- ・5月下旬の降水の影響等により、5月下旬～6月上旬頃に播種したほ場では出芽揃いは良好。その後、6月19日に梅雨入り（降水量7.5mm）したが、この前後の期間はほぼ降水がなく、6月中旬以降に播種したほ場では、乾燥により出芽や初期生育にばらつきが見られている。併せて、雑草発生がやや多く見られる。
- ・播種の早かったほ場では6月下旬から1回目の中耕培土作業が順調に実施されてきたが、6月29日以降は断続的な降水となり、作業がやや遅れてきている。

【麦後晩播】

- ・麦類の登熟が早く、収穫作業も概ね順調に行われたため、麦後大豆の播種も順調に実施され、出芽の揃ったほ場が見られる。その一方で、6月29日以降の断続的な降水で播種を見合わせているほ場も多い。

2 今後の管理

(1) 湿害対策

排水状況を確認し、梅雨末期の大雨等に備えましょう

- ・麦後の播種や中耕培土、除草などの作業が一日でも早く実施できるよう、ほ場の排水機能を確認・改善して、ほ場表面や明きょ内に停滞水が無くなるようにしましょう。
- ・湿害により葉色が著しく淡い場合や生育不良が顕著な場合には、速効性肥料（窒素成分で2～3kg/10a程度）を施用して生育回復を図りましょう。

(2) 中耕・培土

梅雨の合間を見つけて作業を実施しましょう

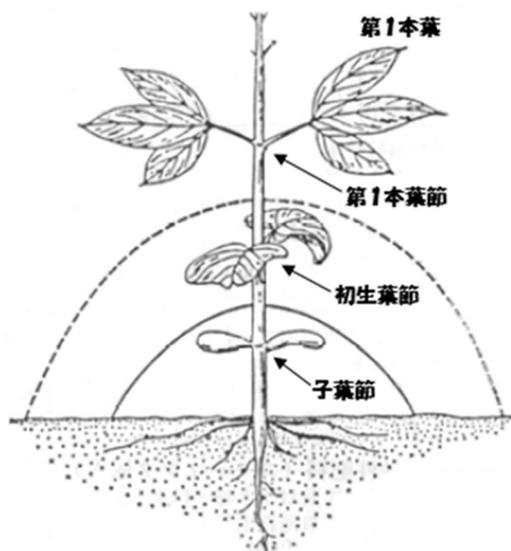


図 中耕培土の目安

普通栽培

- 1 回目：本葉 2～3 葉期に子葉節が隠れる高さまで
- 2 回目：6～7 葉期に初生葉が隠れる高さまで

晩播栽培（麦後）

- 本葉 5～6 葉期に子葉節が隠れる程度の高さまで

※培土した節から「不定根」が発生し、生育促進、倒伏防止、増収の効果がある他、培土そのものでも、土壤通気性・排水性の改善、除草等の効果があります。

※遅い時期の中耕・培土は、主茎や分枝の損傷、断根により生育に支障を来すため、開花の 10 日前までには終わるようにしましょう。

(3) 追肥

「開花期～幼莢期」の窒素養分吸収を補いましょう

- ・ 乾物生産が旺盛となる「開花期～幼莢期」の窒素供給は増収効果があります。
- ・ 根粒菌の活動を抑制しにくい被覆肥料（40 日タイプ、窒素成分で 5kg/10a）を使った最終培土期（普通播栽培では 7 月中旬（本葉 6～7 葉期）、晩播栽培は 8 月上旬（本葉 5～6 葉期））を検討しましょう。

(4) 雑草防除

雑草対策の第一は大豆の生育を揃えることです

- ・ 本年は播種時期の乾燥の影響が土壤処理剤の効果が不十分となっているほ場が多く、今後の雑草防除が重要となっています。
- ・ 「排水の手直し」、「中耕培土」、「茎葉処理除草剤」、「畦間・株間の機械・薬剤除草」、「周辺部の機械・薬剤除草」など、どの方法が効果的か検討しましょう。

<一般的な防除体系>

| | | | | |
|------|-------|-------|-----------------------|-------|
| 大豆： | 種子 | 2～3葉期 | 6～7葉期 | 生育期 |
| 管理： | 播種 | 中耕培土① | 中耕培土② | （手取り） |
| 除草剤： | 土壤処理剤 | 茎葉処理剤 | 畦間・株間処理剤（農薬毎の収穫前日数まで） | |

※土壤処理剤の効果はほ場条件等でバラつく

※茎葉処理剤は何を使うか、雑草の種類や処理時期で判断
（アサガオ類などの難防除雑草は大豆 2 葉期頃から防除）

<茎葉処理剤による草種ごとの対策>

茎葉処理剤は、雑草の種類や発生程度等を確認してから散布できるので、必ず、ほ場ごとに発生状況を観察し、高い効果の得られる剤を選択して使用しましょう。また、大豆への薬害や雑草への効果を勘案しながら、各農薬の適用上の使用時期を守って散布しましょう。

◇◇◇農薬危害防止運動実施中（6月1日～8月31日）◇◇◇

茎葉処理剤の処理時期・効果の目安（詳細は、宮城県「普及に移す技術」第94号を参照）

| | アタックショット乳剤 | 大豆バサグラン液剤 | パワーガイザー液剤 |
|------------|------------|----------------|-----------|
| シロザ | 4葉・5cmまで | 2葉・3cmまで（中） | ◎ |
| ホソアオゲイトウ | 6葉・10cmまで | 3葉・3cmまで（中） | ◎ |
| イヌホオズキ | 10cmまで | 6葉・5cmまで（中） | ◎ |
| オオイヌタデ | 2葉・3cmまで | 15cmまで（高） | ◎（イヌタデ） |
| アメリカセンダングサ | — | 20cmまで（高） | ◎～○ |
| オオオナモミ | 4葉・10cmまで | 6葉・15cmまで（中～高） | ◎～○（オナモミ） |
| アレチウリ | 5葉・つる化前まで | 5葉・つる化前まで（中） | ○～△ |
| マメアサガオ | 4葉・つる化始まで | 3葉・つる化前まで（中） | ◎～○ |
| アメリカアサガオ | 2葉まで | 2葉まで（低） | ◎～○ |
| イチビ | 6葉・15cmまで | 6葉・15cmまで（高） | ◎～○ |
| クサネム | 1葉・2cmまで | — | △ |
| ツユクサ | — | — | △～× |

注1) 大豆バサグラン液剤欄の（ ）は、低日照時の除草効果の安定性を示す。

注2) パワーガイザー液剤の詳細は、BASFジャパン(株)「パワーガイザー液剤技術資料」を参照。

【参考】茎葉処理剤の使用時期

| 農薬名 | 使用時期 |
|------------|---------------------------|
| 大豆バサグラン液剤 | だいたいの2葉期～開花前（雑草の生育初期～6葉期） |
| アタックショット乳剤 | 本葉2葉期～開花前（雑草生育期） |
| パワーガイザー液剤 | 出芽直前～3葉期まで（雑草発生始期～2葉期） |

※大豆バサグラン液剤とアタックショット乳剤は収穫45日前まで。

(5) 病害虫対策 発生病害虫に合わせて、効果的に防除しましょう

- 大豆の病害虫防除は、連作ほ場か、輪作ほ場か、ほ場や子実のこれまでの被害発生状況はどうだったか、防除体系はどうだったか、といった大きな意味合いでの「ほ場条件」で病害虫の発生自体が大きく変わってくるため、効果的で効率的な防除を行うためには、どの病害虫を対象とすべきか整理しておく必要があります。

【主な病害虫】

●紫斑病

タンレイでは特に注意が必要ですが、昨年産では管内のタチナガハでも発生が多く見られました。成熟期の平均気温が18±3℃で、降雨が多いと発生が多くなります。開花期後20～35日に1～2回防除（同一剤を使用しない）しましょう。

●マメシクイガ

連作ほ場で多発します。幼虫が子実の縫合線に沿って食害します。8月末～9月始めに1回目の防除、その7～10日後に2回目の防除を行いましょう。日長に反応して休眠覚醒するため発生時期の年次変動は少ない傾向があります。

●フタスジヒメハムシ

連作ほ場で多くなります。子実に黒色の斑点が生じるほか、大豆の生育期間中に葉を食害（円孔状）します。若莢の表面を舐め取るような食害痕が特徴で、莢の食害部分から雑菌が侵入して被害粒が生じます。

●ダイズシストセンチュウ

播種2か月後頃に根に寄生しているのを確認（白～淡黄色で約0.6mmのレモン型の雌成虫）できます。寄生されると、葉が黄化して茎葉が生育不良となり、線虫の密度が高まるほど症状も著しくなります。作業機械や長靴などに付着してほ場間を移動するので、発生ほ場を確認し

た場合は注意が必要です。土壌処理剤で短期的に根絶するのは難しく、抵抗性品種や緑肥作物、田畑輪換など複合的な対策が必要となります。

●ジャガイモヒゲナガアブラムシ

平成12年に県内各地で大発生し、吸汁被害により葉が早期落葉して大きく減収しました。

| | |
|---|----------------------------------|
| ① 莢内の子実が食害される。 子実が縫合部に沿って食害され、莢に小さな半月形の脱出孔がある。 若い子実が食害され、莢も外側が不規則に食害される。 | マメシンクイガ ダイズサヤムシガ |
| ② 莢が奇形となる。 子実が肥大せず、莢も発育を停止して奇形莢となる。 | ダイズサヤタマバエ |
| ③ 子実が変質、変形する。 a 若い子実では発育を停止する。 b ある程度発育してからは子実が変形し、正常な丸みを帯びない。 c 肥大が完了した子実では、変形はしないが吸汁痕が白濁したり黒変する。 | ホソヘリカメムシ アオクサカメムシ ブチヒゲカメムシ |
| ④ 莢の表面に食痕がある。 莢の表面に舐め取られたような食痕があり、中の子実が黒変している | フタスジヒメハムシ |

(6) 今年作で参考にしたい技術

昨年産のミヤギシロメでは収量水準が高まりました。形態的な特徴では、主茎長が短くて蔓化・倒伏せず、収量構成要素の特徴では、総節数や有効莢数が多く、百粒重は平年並という、ほぼ理想的な生育結果でした。

＜畦間かん水＞……着莢数を確保して増収

大豆は、開花期までは排水対策に重点を置いて生育量を確保しますが、開花期以降は干ばつ対策を実施することで、着莢数が増加し、収量増加につなげることができます。

対策としては、暗きょ栓の開閉（乾燥時は閉め、降水時は開放）管理や畦間かん水の実施があります。畦間かん水では、通水・排水とも速やかに実施する必要があるため、畦間の溝や明きょ・排水溝のつながりについて、実施前に確認しておくことが大切です。なお、もともと地下水位が高いほ場や当該期間の天候次第では逆効果となる場合があるので、実施の際には留意します。

開花期から子実肥大期
(7月末～8月末頃)

……大豆の生育で最も水分が必要な時期



記載している農薬情報は、令和3年7月1日現在のものです。使用に当たっては、最新の登録情報を確認の上、周辺の他作物への飛散等に十分注意してください。